



龍族

RYUZOKU
第18号
南天会
令和2年
4月22日

巻頭言

被災地に祈る仏教者の姿

山本宗補

新型コロナウイルスの世界的な流行による死者は、中国・武漢での発生から3カ月で16万人を超えた(4月19日の時点)。世界有数の経済大国のはずの日本だが、国民の生命や健康的な生活よりも、経済成長狙いの東京五輪開催を最優先してきた安倍政権のコロナ政策は後手後手となり、大流行の兆しを抑えることができない。

東日本大震災と原発事故から10年目に入った3月。佐々井秀嶺師を今年はどこにご案内しようかとも考えながら、福島県、宮城県、岩手県の各被災地取材した。原発再稼働にも五輪開催にも前のめりの安倍首相は、福島県浪江町を3月始めに視察。3月26日からの福島県内での聖火リレー開始に立ち会いたいと表明。聖火リレーの日程に無理矢理すり合わせたかのように、3月14日にはJR常磐線が全線開通。避難指示解除された双葉駅(双葉町)、大野駅(大熊町)、夜ノ森駅(富岡町)が9年ぶりに営業再開した。双葉駅前商店街や駅周辺は建物解体更地化の真っ最中。除染は不十分で生活インフラは未整備。住民帰還は2年後という状況に加え、大野駅も夜ノ森駅も、駅に通じる道路の両サイドはバリケードで覆われていた。夜はゴーストタウンだ。

昨年の龍族に被災地をご案内した報告文を記したが、「来年も佐々井師をまだ再訪できていない被災地にお連れしたいと願っている」と結んだ。だが、コロナ禍により佐々井師の一時帰国は延期となり約束が果た

せなくなりそうだ。

東日本大震災と原発事故発災から3ヵ月後。天災と人災が同時発生し、死者は2万名を超えると思われ、日本中が国難に直面していた。

大津波被災地は、海外の戦場では感じたことのない不条理、無常観が漂い、犠牲者を供養する仏教者の姿がこれほど求められた事態はなかったが、僧侶が弔う姿は稀だった。そんな時、佐々井師から日本に戻りたいとの電話があり、被災地で読経をお願いしますとお伝えした。

3・11から三ヵ月後、岩手県宮古市から福島県南相馬市まで三日間、佐々井師は魂を込めた鎮魂の読経と独特の口上を各地で述べた。住民の大半が避難した福島県南相馬市での口上は強烈だった。

「地下に眠った多くの人たちに対する本当の回向は政府が原発を廃止することだ。地下に眠る25000人の怨霊は絶叫している。これからの日本を再びわれわれのようにするのかと。いかに坊さんが教典を読経して歩いて、この原子力発電所を廃止できなければ、教典も無力であり、仏法の法道も教学も一切の宗教の教学姿勢も無益である」

ウソで五輪招致に成功し、あたかも原発事故は片付きましたかのイメージを国際社会に振りまこうとした安倍首相の野望は、コロナウイルスで蹴散らされ、来年に延期した五輪開催にも赤信号が点滅し始めている。無責任で無能な為政者の地獄への道連れとならないために私たちに賢明な判断が課されている。

(やまもとむねすけ・フォトジャーナリスト 南天会賛同人)

※表紙写真 2020年3月10日 福島県浪江町請戸海岸

東日本大震災と原発事故により犠牲となった生きとし生けるものを弔う僧侶 山本宗補撮影

右:2020年3月14日常磐線全線開通した日の双葉駅9年前から時間が止まったままの双葉厚生病院界隈
下:2011年6月に帰国して被災地を読経行脚する佐々井秀嶺師 (山本宗補撮影)



母国日本国民へ捧げる、 沙門秀嶺 遺言

2020年4月15日

母国日本の皆様方、私ことインドで52年間の暮らしをしております、佐々井秀嶺という小僧でございます。大抵日本においては私のことはいろいろと南天会の諸先生方また他の機関を通して薄々ながらも聞き及んでおると思いま



す。私のインドへ渡ってきた目的は、大乘仏教八宗の大高祖と言われております龍樹菩薩という大菩薩の御応現御召喚に応じて、単身1967年頃インドの大地に、しかも南天竜宮城というインドの最真ん中の地に来て約52年間生かしていただいております。

私のことはこれぐらいにいたしまして、これから皆様にお話し申し上げます。うと思ってる課題は、現在全世界においてコロナという病気が最流行しているようでありまして。このためにインドは家から一步も出られないというような厳しい状態の中にロックダウンというその規約の中に生きていかななくてはならなくなっております。それで私も我々の出すぎる行動が人類のためにマイナスだと思つて自重して、行動は政府の指示に従っております。日本はどうでしょうか？

私の随身の亀井竜亀という弟子がおります。インド僧の名前はビーマ・ボデイと言います。ビーマという言葉は、インド仏教にて現在第二のブツダ全インド全世界救世の使徒であるというアンベードカル博士ことアンベードカル菩薩のお母さまの名前がビーマと言っております。その名を取つて、今から4年前に南インドのテランガナ州において約500名くらいの集団改宗がありました

時、その導師として頼まれて、日本人の亀井の改宗というのかシユラマネール、日本語では沙弥と言いますが、この儀式の得度を受けたと言いましたので、連れて行きその時に命名したのがビーマ・ボデイという名前です。とてもいい名前だと皆様方が言つてくれております。彼のインターネットを通じての調査でも、日本は最近どんどん増えていっておるといふ。毎日300人くらいの比率でコロナの症状が現れ、病院に入院していると言っております。またこの間、こうした事情において日本の総理大臣様である安倍晋三氏が非常事態宣言を出されたというのを新聞で見ても、また亀井のインターネットにおいて聞いております。私としてはちよつと遅かったんじゃないかと思つたんですが、まあ総理大臣様にはいろいろ事情があつてのこと、この間非常事態宣言をされ、現在日本は非常体制の中に置かれていふことを聞いております。特に関東、あるいは北陸九州というように弱つておるようであります。そのため学校の生徒方が休学しておるということでありまして。一般にも大きな商店街が閉ざされているというのを聞いております。なるべく全日本に深く入らないように、早くこれらの病魔が日本の大地から退散してくるようになにより母国の皆

様より大変お世話になり、ご支援をいただいております皆様方の子どもである佐々井秀嶺も非常に心配して、自分もインドの非常体制の中に置かれて、この84歳の年齢において運動しなければ足腰が痛み、そうでなくても40年前に高いステージが壊れて下敷きになつて腰骨を打つて4か月身動きもできなかったのが、数十年経つて年寄りになつてまた出てきました。日本から頂いた遠藤さんだとか古川さんだとかあるいは心ある皆様から頂いたそうした激痛に耐える打撲に耐える骨折に耐える張り薬を張つて耐えて生きておりましたところ、またこのように外に出ない状態になつてますます運動不足というのかそれがために痛んで、毎日弟子方にマッサージやら張り薬を張り替えたりしております。私はインド仏教界のまあ最長老という見方をされております。そして生きてる仏教と言われる、現在の大地インド大陸においてその最中央に位置するナガプール、これが現在わたしが活動舞台の本拠地しているところでありまして、そのナグプールのアンベードカル大菩薩がインドに仏教を復活した大聖地、また毎年何万人という改宗式をしておりますデイクシャ・ブーミ改宗広場というところの会長に推され、もう5年間拙きながらも会長の役をこな



しております。またブツダガヤの16年間にわたる解放運動、現在も最高裁判において審議されつつありますが、そういう活動から、マハーラシュトラ州政府も、ナグプールの警察当局も私に特別に車に乗って仏教徒のあちこちの状況を見たり、あちこちの仏教寺院の現状を見たりするためか、毎日動いてもいいと、出歩いてもいいという警察署長のパスを発行してくれております。しかし私だけが歩くのもどうも身が引けてならず、またひよつとしてその病魔がうつっては困るということにより、3日に1回出歩くことにしております。他のお坊さんや他の人たちは全部家にこもっていただければなりません。今インドのコロナ

病患者は一番多いところはボンベイ、これはインドの表玄関、インドのヨーロッパというようなインド経済の中心地であります。だから外国に行ったり来たりする人が内緒で入ってきたりしているのかもしれないが、一番多く病者が出ております。現在2000人以上、もう亡くなった人もボンベイはだいたいぶおります。まあ10000人以上は全インドにおいて病魔に侵されて、だんだん増えていっております。一日一日と。それでインドもモディ首相が3月の25日ごろから非常体制を敷いて、今日4月15日ますますインド全州全域各州ごとに病人が多くなっておりますので、本来は昨日14日で非常体制を解くというのが、全インドの各州首相たちがまた集まって首相を囲んで討議した結果、来月の5月3日まで非常体制を続けるというようになっております。今日解けるかと、今日にやめられるかと、しかしインド全体がどんどん増え、アメリカ、イタリーと次々倒れ死んでいる。中国は分からない。中国自体が発表していない。しかしこれも何万人という人が亡くなっていると、何十万にも及ぶかもしれないと、いうことも聞いております。ナグプールは現在市長やら州会議員やら警察署長らが非常に厳しい監視をしておりますので、56名に留まっております。

ます。次々に増えております。一日に10名ずつぐらい。ボンベイも先ほど言いましたように1800名ぐらい。ですからみんなマスクをしております。政府からくれるマスクもあれば、また薬局に売っているマスクもいっぱいあります。中には変なマスクを作って通用しないようなマスクを作って売っています。40カロール、日本で何千万円もの闇売りをしたそのような人も捕まっております。インド人はほとんどマスクをしません。風が吹いても雪が降っても台風が来てもそういう習慣です。ですから我々も異国人が時たまマスクをしておりますと、ジャイナの、ジャイナ教というのがあります。お釈迦様の当時に出来た宗団です。ジャイナ教の人たちは生き物を吸って殺さない。風の中に空気の中にいろいろな微生物が生きた微生物が動いていると、それも吸っては殺生になると、ジャイナ教は徹底して不殺生戒です。ジャイナの教師はいつでもマスクをかぶっております。ところが今回我々もときどきマスクをかけると、「なんだお坊さんのくせにジャイナ教になったのか」というようなことを言われたことが2、3回あります。それほどインド人はマスクをかぶらなかつたのであります。今回全部の人が、小さな赤ちゃんからおじいちゃんまでマスクをかけております。幸い

私のところには、荒金龍湖という弟子が日本におります。この人はなかなか良く気付く人で、日本からたくさんマスクを送ってくれました。やっぱり日本のマスクはいいですね。インドのマスクはあまり好きじゃないねえ。ですからいつも日本のマスクをかけて歩いたり車に乗ってもマスクはしますが、心が安まります。ということ今非常体制は5月の3日、今日昨日で終わりと。というのは昨日がインド仏教再興の大導師、インド憲法起草の父全インドの人は心から彼の名を呼んで止まないかのアンベードカル大菩薩の誕生日4月14日でありました。とにかく益々アンベードカルは確実に育っております。ですからアンベードカル菩薩の誕生日4月14日には、改宗広場すなわちデイクシャ・ブーミには何万という人が押しかけてきます。もちろんインド各州の人も来ます。マハーラシュトラ州、U.P州、デリー州、グジャラート州、ウーパール州、グジャラート州、ウーパール州がたくさんあります。そういう所からも来ます。これが今政府は5人以上は溜まって話してはいけない。5人以上は一緒になつて会議もしてはいけない。非常体制をかけて規制をしていますが、目下4月14日にはアンベードカル誕生日には毎年毎年何万人という人がなだれ込んできます。ちょうど秋10月のヴィジ

ヤヤ・ダシユミ、アシヨカ大王の平和宣言の日、オリツサ州にその碑文があります。が、そのアシヨカ大王のダンマで世界を征服すると、武器や原子爆弾やらあらゆる武器を廃止して、釈尊の福音を釈尊の説法を最大の法の武器として全世界を征服するというアシヨカ大王の平和宣言の日、インドではヴィジャヤ・ダシユミといひます。ヴィジャヤは勝利、法の勝利。我々はそれを大改宗記念日と言ひます。かつてアンベードカルは1956年10月14日、ナグプール、ナーガ族の首都インドの真ん中において、仏教に改宗した。ビルマ仏教の最長老チャンドラマニ大長老により仏教徒として守るべき五戒を受け、仏教徒となったアンベードカルは、自らマイクの前に立つて、約60万人の人を一挙に改宗せしめております。毎年10月14日は大改宗記念日ということで約100万人の人々がナグプールに殺到して、地涌の菩薩たちがナグプールにぎつと降りてきます。出雲大社の神在日、神が集まる日、全世界の神様が出雲大社に集まる日があります。そのように全インドの地涌の菩薩たちが、地から湧き上がった、かつては人間としての資格も何もないような非人間と言われた人たちが四方に立つて大改宗記念日に参加しています。ちょうどそのように誕生



日もそうなのです。ですからインド政府マハラシュトラ政府ナグプール市長やナグプールのポリス達は頭を痛めます。どうしたらこの非常事態、5人以上集まっただけいけないと、しかもインドの村々農村地帯の人たちは新聞もあまり読んでいない、テレビも見えていないような人は非常体制が敷かれているのかわからないのかかわらない。だーっと押し付けてきます。それをどう防ぐか。私も全新聞に、改宗広場の、まあ日本でいえば管長さまですな、会長として〇〇から全新聞に出しました。4月14日、改宗広場ディクシャ・ブーミの全部四方八方から道を封鎖すると。そこにはポリスが銃を持ってずっと構えておる。改宗広場

のその聖地の大ドームも閉めて、封鎖ということでもポリスが何十人も立っております。四方八方、だから家から絶対出ないで下さいと。捕まったら叩かれます。警察は警棒を持っております。ピシッピシッ容赦なく叩く。その上叩かれた上に5000ルピーの罰金を科せられる。大変なわけです。だから皆さん、私の呼びかけは、仏教徒の皆さん、アンベードカルを信奉するインドの各宗教を問わず、お願いいたします。4月14日はアンベードカル大菩薩の誕生日です。どうか外に出ないでください。皆様方の家の中でアンベードカル像とかブツダの像とかあるいはお写真を、華を掲げて線香とローソクを灯して、一家でブツダン・サラナン・ガツチャーミ、ダンマン・サラナン・ガツチャーミ、サンガン・サラナン・ガツチャーミ、それからブツダへのお勤め、ダンマへのお勤め、サンガへのお勤めをしてください。あなたの方の心の中にアンベードカルとブツダがあるならば、外に出なくてもそこには大改宗広場の大ストウパーも胸の中にあるはずですよ。ですから皆さん、一歩も出ないでください。ただインド憲法を勉強してください。アンベードカルが自分で書いた、心血を込めて書き上げた立正安国論。宗派宗派の立正安国論ではありません。アンベードカルは、国の立正安国論です。それを

見なさい。勉強しなさい。時間は十分にあります。毎日働かに行かなきゃいけない、毎日学校に朝8時ごろから行かなきゃいけない、夜まで働かなきゃいけない、本も読めない、お勤めできない、という方もあるでしょう。今は朝から24時間十分に時間があります。ブツダのお勤めをやってください。アンベードカルが書いた「Buddha and His Dhamma」(ブツダと彼のダンマ)という本を、イングリッシュもあればヒンディーもあれば各州の文字になって現在には出ております、読んでください。そして憲法を、はしがき(前文)を肝に銘じて覚えてください。十分時間があります。私も十分時間があります。勉強させてください、と全新聞に発表しましたし、それからインターネットの人が3人来ました。もう次の日には私の言葉が英語に訳されて、チェンナイ、昔のマドラスですね、タミル・ナドゥの方にあります。またテレビも来しました。我々は14日朝6時、アンベードカルの大像にすべてお坊さん方9名で花を掛けて、それから窓を閉めて約一時間にわたるお勤めをしました。テレビが来ておりました。夜間いたら出ておるといってました。全部坊さんやインドラ寺の仏教徒が本尊の像を囲んでお勤めをし

ている姿が鮮やかに写っていました。私は腰が痛いので、40年前の骨折が痛みますので、弟子が気を使って腰かけを持ってきてくれましたので、それに座って弟子方と一緒に勤めをいたしました。しかし中途から私は出かけなければいけません。あとは弟子方に任せて、車に乗ってサビダンチョーク、ここから約20分くらいのところです。しかしあちこちでもう警察が前方を塞いでおります。サビダンチョークには一人も行かせるな、一人が入れば次が入る、いくつも防壁があり、行くのに45分かかりました。私一人です。ドライバーにお弟子が付きました。プラジュニヤ・ボデイというお弟子です。これは日本で10年間くらい岡山の池田公の菩提寺と言われる名利臨済宗の曹源寺原田御老師様という立派な御老師様のもとで修業させていただきました。現在私のところで勉強したり運転してくれたりしておりますが、それを連れて参りました。道道「帰れ！帰れ！ここから先は通れない。」そういうところでまた問答をして「警察当局に聞いてくれ。俺を追い返していいのか？進めていいのか？聞いてくれ。」それでまた電話で聞いてから「通れ」と柵を開いてくれました。また大きな道で止められる。「なんだ。先ほど通してくれたのに。」

それととにかくもうサビダンチョークという、日本語で言えば憲法十字路と言いますが、憲法の名前が付きます。日本でも伝教大師十字路だとか弘法大師十字路だとか日蓮十字路とか親鸞十字路とか、いろいろなところに出くわすこともありま。そういう憲法の名前のつく十字路、広場になっています。大広場です。この憲法十字路という名前を付けたのは実は私なんです。新聞にも記録されておりま。しかし俺みたいにならばけな坊主が、異国の坊主が何をしてやがるんだと、インド政府に目をつけられたでしょう。インド民族党BJPが大々的に憲法チョークという看板を掲げておりましたが、今は公に憲法チョ



ナグプール市内 自主的に設けられたバリケード

ークとしております。今も昔も憲法チョークです。そこにまず着きました。ところがポリスが50人ぐらいいます。とにかく人の集まるところは、憲法チョーク、憲法交差点と改宗広場、仏教徒が大勢集まる場所はこの二大地点であります。憲法交差点、改宗広場、ずーっと憲法交差点の全方から四方から封鎖しております。そんなことでどうやらこうやら押問答で入って、警察の偉いやつは誰が来るのかなと、どんな奴が来るのかなと、待つこと40分。誰も来ない。なんだこの野郎。俺は来なくなかったんだ。誰も出ると言った張本人が出なくてはいけなくなつたのは、警察当局の偉い人が「佐々井を呼べ」と、言われたから来たんだ。俺は全新聞に、TVに、インターネットに、一歩も出るなよと、自分で言ったやつが自分で出る、俺は罪悪で気が引けるので「行かない」と断つたんだ。それでも出て来いというから押問答して出てきたんだけど、来ない。来ない以上はしょうがない。ここに来た以上は目の前に大菩薩のお像がある。これに花を掛けずには、たとえポリスが俺を縛り、拳銃を向けようとも、怖れはしないんだと、何もいらん！金もいらん！命もいらん！と最初から決めた俺の三大願文、それに向かって突進していた。「どけ！」扉を閉じています。「こ



れを取れ」「上役に諮ります」「上役でも何でも呼べ！」そしてたら飛んでいきまして、上役他すべての交差点におつた警察がだーつと一挙にやってきました。そして扉を開けました。堂々と入る。そのためにカメラを持っておつたプラジュニヤ・ボデイが、カメラを忘れて花輪だけ持ってきた。当然でしょう。彼も慌てておりますから。上に上がりました。そして私の後について警察が20人ばかり幹部のようなのが上がってきました。それからお花を掛けた。プラジュニヤ・ボデイも花を向こうから掛ける。「文句あるか！」とぐつと睨んだら、皆合掌しておりました。そしてたら警察方も大きな花輪を持ってその締めを解いております。「なんだこいつら。」「バンテージー、ここに居てください。」「なんだ。俺はもう用は済んだんだ。帰る。」「居てください。」「というので居りました。今日の新聞で見ますと、警察の偉い、一番偉いやつではなく二番目くらいのやつが、花輪を掛

けております。みんなで記念写真を撮りました。言わば警察たちに守られたジャヤンティ(誕生日)、憲法交差点において、先ず花輪を捧げました。下には女の警察やら男のが40人くらい、皆合掌しておりました。いかにヒンドゥーであれ回教徒であれキリスト教徒であれ仏教徒であれ、憲法を起草したアンベードカル大菩薩に向かって敬礼をしないではいけません。

それから次は改宗広場です。改宗広場へはまた道が塞がれています。今度は大回りで行った。いつも俺の前は通さななんだ。電話をかけて通せと言うと、「本道に出てはいけません」と、いたるところで封鎖しているので間道を行ってくと、分かった、間道を真つすぐ進んで改宗広場に無事着いた。アンベードカル顕彰委員会、アンベードカル協会のメンバーが2人来ることになっています。警察も入れて3人。来ない。協会前事務総長のガジベーさんの息子に電話を掛けた。「私が行きます。ちょっと待ってください」と、しばらく待っておった。そしたらSP、別のやつですね。これも50人から来た。「一緒に供さしていただきませう。」おう、SPさんも来るのか。よしやってくれ。」というわけで、改宗広場のアンベードカルの銅像に花輪を捧げました。彼も光栄でしょう。高いところに

上って花輪を掛けた。さらに仏像にも掛けて、パンチャ・シーラ五戒文、不殺生戒、不偷盜戒、不邪淫戒、不妄語戒、不酤酒戒を唱えて、そしてドームの中にストウーパがある。これは仏舎利のストウーパではありません。アンベードカル改宗大記念塔と言います。アンベードカル改宗大記念ストウーパ、その中央に進みます。その中央には金で作ったストウーパがあります。しかしその中にはアンベードカルのお舍利はありません。それより地下10メートル、そこにアンベードカルのお舍利は納めてある。前改宗広場プレジデント、ラスガワイ氏。これは大政治家でありました。国会議員にもなり、あるいは州会議員にもなり、何十期とやった大政治家でした。その人と、事務総長、前事務総長はこの間亡くなりましたサダナンダ・フルズレ氏、アンベードカル博士が改宗した1956年に彼はナグプールの副市長でありました。アンベードカルが改宗する用意は全部その副市長であったサダナンダ・フルズレさんがやりました。これも歴史的な人物です。一步も出ない。ただ改宗広場の莊嚴に尽くすため一生涯を捧げた人です。この間亡くなりました。だからこの改宗広場で、花輪を捧げました。中に入ってブツダ・マンガラン、ダンマ・マンガラン、サンガ・マンガランと大行進して、

タイから仏像をいただきました。これがこのドームの本尊となっております。これは私が30年前ぐらい、全ナグプールの大行進しました。その時に私は、熱い時なのでとうとう気を失って、目を覚ましたら改宗広場の一室で医者に見守られておりました。その本尊、タイから頂いた仏像が大改宗記念塔の本尊となっております。そこでお勤めをし、それから外に出ます。SPさん、名前を聞かなかったんですが、私はこれから空港に行きたいのですが、ここ改宗広場と憲法交差点は警察の命令で来たんですが、今度はエアポートの前には、ドクター・ババサハブ・アンベードカル・インタナーショナル・エアポートというのが正式な名前ですが、その前には大きな像が立っております。これは私たちが大闘争をして立ててもらった銅像です。断じて行

かなければならない。前にヒンドゥー教徒が立てたアンベードカル博士の銅像が、下を俯いた銅像がちよつと小さいのがありました。それをどけてくれ。アンベードカルはかつて下を俯いていない！堂々と胸を張って、われも一人の人間なり、われもインドの人間なり、と闊歩して歩いた生涯である。それを俯いた像を造るとは何事だ！取り払え！約2年間大闘争して取り払わせました。その後、堂々とした上を見つめ智剣印、剣印だこれは、大日如来は智拳印、これは智の剣印だ。それを示したアンベードカル博士の像を立った。だから断然行かなければならない。それでSPが「わたしも行きます。連れていきます。」お前やけに好意的だな。じゃあ先に立って行ってくれ。その後を着いて行くから」それから彼らは彼らの車でカメラマンも連れて行きました。途中あれほど私が言ったのに、青年方が固まって話をしておる。さあSPが怒った。車を止め警棒を持ってバンバンと殴り始めた。私には穏やかに話していたSPが鬼のようになって警棒を振っている。すごいことをするなあ、と思ったけれど、もうサーツと蜘蛛の子を散らすように逃げていきま



散らすように逃げていきま

した。それでようやくエアポートに着くとそこにもポリスがおりました。しかしSPがおるから文句が言えませんが。それでSPも花輪を持ってきておりました。なんだ改宗広場でないでここで出して。わたしは今回は新聞には発表しないと行って来た。ただ写真だけ取ってくればよしと。ところが、彼も花輪を掛けた。私も花輪を掛けて、私の姿は消してあります。ただ私の撮った写真だけ出ております。そこでパグワン・ブツダ・キー・ジャイ、ボデイサトヴァ・ババサヘブ・アンベードカル・キー・ジャイ、アンベードカル菩薩に勝利あれージャイ・ビーム！三度大音声で叫びました。SPが変な顔して見ておりました。それからSPには帰ってもらいました。我々は今度は本道を通って帰りましたが、こういうことで昨日は終わりました。

また今日から第2次非常体制が敷かれております。5月3日までです。今日また私は出て歩く免状を、パスをもらいに、人を使わしております。私の実践が警察も気に入らしく、新聞には「憲法交差点で第一番にアンベードカル大菩薩に花輪を捧げたのは、改宗広場の会長である佐々井秀嶺師である」と警察が発表しております。私が出さなくても警察当局が発表しております。改宗広場のことも発表しています。しかし

エアポートのアンベードカル大菩薩の大像に花輪を捧げたことは発表しておりません。しかしアンベードカル菩薩は私の真心を見守って分かってくれておると思っています。

その後、マンセル、ナーガールジュナ（ラームテク）に行きました。マンセルもナーガールジュナも観光地となっております。インドの最右翼、BJPの後盾となっておるRSSの本拠地です。だからここで問題を起こされたら大変なことになる。そしたらマンセルに着いたら大騒動です。大勢の人が寺の中におります。わたしはいきなり番人のウケイさんをぶん殴りました。3つほど。あれほど全土にナグプールの新聞に出しておる、私の面子は丸つぶれ。もしここでコロナが発生した場合は、それこそRSSの本部だ。すべての仏教徒が叩かれる。仏教徒はこういうことをしていると。そういうことを感じたので思わず殴った。ところが後から聞くと、ハイデラーボードという現在テランガナ州の州都となっておるハイデラーボードからナグプールまで歩いてきたという。自動車も無い。自動車も無い。バスも無い。出稼ぎに行った人たちが、自分の国に帰らせられる。ロツクダウンだ。ハイデラーボードからは400キロあるんだ。400キロをウケイさんのことを頼って歩いてきている。

へ口へ口になって。それでマンセルの婦人会が、私のお寺の婦人会がご飯を作ったんで、差し上げようと、それを知らなかったんで、俺は思わず「出て行ってくれ！」と大声でやった。「警察署長を呼べ！ラームテクの。「若い青年の警察がいて、すぐ電話したらしい。しばらくしたら来た。ところが後から聞いて、60人ぐらいの人が、へとへとになっていると。「そうか、それなら分かった」しかしもう追い出してしまっているの、中に入れてはいけな思っ、道のほとり木陰で、そこでご飯を食べてくれ、早く持ってきてやれ！なぜ俺に電話しなかったんだ。ウケイさんに謝らなさいけない。ぶん殴ったから。それで警察が5、6人連れてきた。「なんだお前たちは。「私たちも知らなかったんだ。「そんなことではいけない。みんな寺に入つて水浴びをしたり、水汲みのモーターをこの間変えたばかりなんだぞ、何万ルピー出して。何十人の人が水浴びをしたら、またモーターが壊れちゃうかもわからん。なんだお前ら、こんなところに入れて。「何も知らなかったんだ」「知らないとは何だ。警察を置いておいて。」警察は各寺に一人ずつ置いておいて。そういえばいたな。インドラ寺にも、改宗広場には何十人も居ったな。憲法交差点には100人ぐらい居った。「そうか、

それで電話で何と聞いたんだ。「バンテー・ジーが怒っていると。「当たり前だ、俺は全部の新聞に出しているんだ。その本人がこんなことしているんだもの。これじゃ俺も縛付きだよ。俺を縛っていい。」「いや知らなかったんだ。「この人たちはいろいろあつてこんなことになっているんだ。ご飯を食べていないというじゃないか。死にそうになっているじゃないか。5、60人が。出稼ぎに行つてそれで締め出されて、アンドラ・プラーデーシ州からテランガナ州からナグプールまで来て、これからマツディヤ・プラーデーシ、チャティスガル州ライプールの先に帰るといふじゃないか。先とはシルプールの方だ。何だ。知らんじやすまないぞ。この人たちに「ご飯を食べさせてやれ！」「いや用意はしています。「どこに用意しているんだ」「ラームテクのガンディー・チョークの横にアンベードカルのガンディー・パワンというのがあり、そこにいつでも用意しています。「本当にいつでもか。しかしもうこちらも婦人会が「ご飯の用意をしている。もう死にかけているんだ、飢えて。だからここで食べさせてやれ。「それで、いったん追い出した人をまた呼んで、木の下に座らせて食べさせました。そして今度はナーガールジュナに行つた。警察が3人くらいいる。「ご苦労さ



ん」ところが私 came たということを知り、あちこちから青年方が来て集まっておる。たちまち15人くらい。これはいけない、5人くらいならばいいけれど、15人もこんなところに座っていてはいけない、すぐに帰ってくれと。外にまで車を持った奴らが大量居った。それで帰った。そういうわけで私のマンセルとナーガールジュナでは、ちょっと批判的なことをやったけれども、腹がすいているのを見て、死にかけているのを餓死する寸前の人を助けてくれている婦人会を怒鳴るわけにはいかない。ありがとうと、ウケイさんを3つ4つ殴ったけど、すまなかつたとその場を収めて帰ったわけです。そういう一日でした。

今日の新聞には、インドラでは皆家々ごとにローソクを灯していたと、花火を上げてアンベードカル・ジャヤンティを祝っておったと。インドラだけじゃない。全ナグプールで家の前にローソクを立てて、そして花火を打ち上げました。寺に來られては困る。寺に集まってはいけない。家でやってくれと、そういうわけで新聞にも大体私の真心が伝わったように書いておりました。

それですから日本の皆さん！日本はまだ厳しくなっていない。この間新聞を見たら、マレーシアにおける一日本人が、日本に向かつて「日本は厳しくしていない。」と文句をつけたらしい。それが新聞に出ていました。日本語じゃない、ヒンディー語で。マレーシアにも日本人がおる。民部さんという人を知っているが、民部さんが言ったのかも知れない。だから日本は厳しくくない、もう少し早くやればよかつたと言つても、日本経済のことも考えないといけないし、またそばに中国、韓国、北朝鮮があり、苦しい立場だ、総理大臣も。金の考えもしなければならぬし、毎日300人から500人

増えていると今亀井竜亀の報告です。日本も中国のように秘密主義を守っているのかもしれないけれど、日によって新聞に載せていない。中国は出ていない。しかしある一地域だけでも7万5千人

出たという。それが何地域もあるというから10万、20万、50万くらいになっているんじゃないか。でも詳しい報告は出ていない。日本でも毎日300人から500人、これは大変だ。日本は小さい国だ。人口も少ない。日本人が全部、病に倒れる可能性もあるぞ！中国に比例したら、アメリカに比例したら。私の胸は時々母なる国日本がそういう状態が起きたら最も悲しい。この間、ユーチューブを見て居たら、最も人を笑わしておった、何とかといったな、志村けんという人が、亡くなっている。コロナで3日でなくなっている。気分が悪い、病院へ行った、意識不明になった、亡くなくなりました。こういう人を楽しましてくれた人も亡くなっておる。

総理大臣様！あなたも危ないぞ。だから気を付けて、全国民を守ってくれ！かつて第二次世界大戦が終わわり、マッカーサーが日本に來た。昭和天皇様が、どうか命を助けてくれと言うだろうと思つていた。ところが天皇はびくともしない。堂々として、一切の罪は私にあると。イエスキリストが一切の罪を背負つて磔になつた。昭和天皇も軍人の名前を出さない。東条英機の名前を出さない。近衛大将の名前を出さない。一切は我が罪。私はどうなつてもいいから、八つ裂きにされてもいいから、いかなる

首晒しになつてもいいから、日本民族を絶やしてはならない。無条件降伏をする。堂々としている。これに感激したマッカーサーは、いやーびっくりした、立派な支配者だ、天皇陛下を厳罰に処してはならんと、心に決めたのだろう。安倍首相様、あなたもそういう気持ちで、日本国民を、人口の少ない。中国の患者もいっぱい居る。韓国の人もいっぱい居る。日本を守らなければなりません。あなたの苦衷が分かる！遠いインドにおつてもない、左翼でもない、真ん中の立場から冷静に物事を判断している者である。だから日本の国民を守るために、経済を守るために、イラン、中国、ロシア、三国同盟をしている。アメリカを入れていない。日本も入れていないような気がする。石油を止められたらインドも日本もぺつしゃんこだ。アメリカは雄大な油田を自分で持つておる。そういうことが心配です。日本の皆様、マスクをしてください！お手を洗ってください！私も毎日手を洗つておる。泥だらけ傷だらけゴミだらけの人間でも、まだまだインドの糞だらけの人間でも、まだまだインドの為にインド人の為に、あるいは母国日本の為に、85歳でももう少しお役に立てばいいということから、皆さんの忠告やら意見やら愛の言葉を聞いて、手を洗



い消毒する、衣服を整えております。
 どうか皆さん、私はインドから日本を見て、亀井竜亀の報告を聞いて胸がドキドキドキしています。何に対してもドキドキするような人間じゃないんだけれども、ところがこのコロナというアメリカの大統領も恐れておるビックビクしている、中国は秘密的になっていくけれどもどういことになっているのか、日本は安倍晋三総理大臣は同じ日本人です。だから日本人と日本人、秘密主義にしても分かる。だから日本国民を守ってもらうように。

南天会の皆さん。皆さんも注意してください。皆さんのおかげで2011年より毎年日本に帰っております。そのため毎年ご支援をいただいておりますが、ひよとして5月3日が延びたらブツダ・ジャヤンティもまた止まります。ひよとして今年には帰れないかもしれません。アメリカに招待状をもらいました。しかしアメリカもコロナの病魔が襲って

おります。これも完全に中止されました。

日本にいるインド仏教徒の皆さん、インド人の皆さん。インド政府が日本政府に、日本にいるインド人は帰さないでくれ、という親書を日本政府に送っております。そのコピーをもらいました。だから日本におるインドの仏教徒の皆さん。お孫さんもおれば子供さんもおる、奥さんもおる。だいぶおると思っています。頑張ってくれ！忍耐ということがあります。仏教徒ならば忍辱波羅蜜。回教は、どうあろうとも歯をぐつと食いしばって、敵の来るのを待つ。忍辱波羅蜜。カーラチャクラというのがあります。時代が解決してくれる。時期が解決してくれる。天が、泣くな、ひるむな、じつと我慢して歯を食いしばって、与えられた時間を、インド憲法を読むとか、日本国憲法を読むとか、般若心経を読むとか、座禅をするとか、仏教のお勤めをするとか。ヒンドゥー教徒の皆さんもおるだろう。回教徒の皆さんもおるだろう。皆さんはそれぞれ忍辱波羅蜜、クシヤンティ・パラミター、十波羅蜜の中でも日本人は六波羅蜜を重んじます。その中の忍辱波羅蜜だ。頑張ってくれ。南天会のみなさん、それをインド仏教徒の皆さんに忠告してくれ。

それでは皆さん、ながらくながらく

たらたらと申しましたが、これは何回かに分けてもいいから、発表していただきたいと思っております。どうもありがとうございます。どうございました。

オーン ナモー ナーガールジュナ
 ボディサトヴァヤー(三度)
 オーン ナモー アンベードカル
 ボディサトヴァヤー(三度)
 ナモー タツサー ヴァガバト アラハト
 サンマー サンブツダツサ(三度)
 ジャイビーム！

(編集部にて書き起こし 文中個人へのメッセージ等は省略しました。この映像はYouTubeに同タイトルにてアップされています。)



インドの憲法〔新版〕

— 国民国家の困難性と可能性 —

アンベードカル博士が起草した、世界最長といわれるインド憲法の全文和訳(2016年第一〇一次改正までを収録)

関西大学出版部 2019年刊
 356P 定価(本体3200円+税)

インド現地報告

亀井竜亀

インド全土がロックダウンとなった。それが何を意味するのかも後で調べて知ったほど無知であった。それでも不安にならなかつたのはインドが段階的に行ってきたコロナウイルス対策に徐々に慣らされていたからかもしれない。

2月5日に南天会ツアー一行と共に成田空港からインド入りした時にはちょうど中国での感染者が増えていた時期であった。私たちは夜19時頃に德里空港に到着した。空港内では税関職員が中国人の入国はできない事をアナウンスして走り回っていた。中国で流行っている未知の病気、これくらい感覚でニュースを見ていた。これからコロナウイルスの問題で世界がインドがどのようなようになっていくのか、この時には想像できなかった。ただ感染が広まるのは時間の問題なんだろうと認識していた。

私たちは翌朝、ドンガルカル世界仏教徒大会に出席する為、德里空港からライプール空港へ行く予定であった。しかし天候不良と季節外れの雨で到着が4時間ほど遅れた。

今年のインドは100年ぶりの大寒波、そして雨と普通ではない気候が続いていた。佐々井上人に一月半ぶりにお会いした時には声が出ないと体調も悪い様子であった。日々の活動の忙しさに加え寒さが影響し体調を崩されていた。

2月も後半になると佐々井上人も普

段の力強さを取り戻された。しかしこの頃になると連日テレビニュースや新聞で日本のコロナウイルス患者が増えていることが報道されていた。

佐々井上人は内心、日本人観光客がコロナウイルスをインドへ運んで来はしないかと心配されていた様子であった。

3月3日になって、インド政府は日本人に対して発給されていたあらゆるビザを無効にすると発表。事実上日本人の入国ができなくなった。

この頃、インド国内では電話をかける初めにコロナウイルスに対する注意喚起アナウンスが流れ、最後に体調が悪い時にかける電話番号を教えてくれていた。インド政府が徹底的に注意喚起を行っていた。

インド政府には感染が広まるとうなるのか容易に想像ができたのだろう。何しろ人口が桁違いに多い、それだけ人と人との距離が非常に近くなる。一般の人や貧しい人たちが通うような病院では衛生管理もコロナ対策も到底できているようにはみえない。このような状態でもし広まれば止めようがないのだ。厳しい規制、あらゆるメディアを使った注意喚起はその危機感の表れだった。

そんな中でも佐々井上人は使命信念に基づいて活動を続けられておられた。

3月15日、日曜日この日も弟子9名を引き連れて法要先に向かわれた。場所に着くなり、佐々井上人の携帯電話にアンベードカル博士記念協会事務総長サダナンダ・フルズレ氏(92歳)の訃報が伝えられた。



サダナンダ・フルズレ氏葬儀



3月11日 東日本大震災慰霊法要



2月23日ウパサンパダ(具足戒)授戒式

今振り返れば亡くなる日が少しずればロックダウン都市封鎖と重なりナグプール市民あげての葬儀はできなかったかもしれない。

3月18日、この日は翌日に控えたイベントに参加する為、10時間かけて車で移動予定であった。しかし大人数が集まったの集会となる為、主催者から中止の連絡があった。この日を境に通常の活動が制限され始めた。

3月19日モディ首相がテレビ演説。内容は22日、日曜日は朝7時から夜21時まで外出を禁止する。夕方17時には国民は全員自宅前やバルコニーにたつて拍手をしたりベルを鳴らしたりして警官、医療従事者、配達業、メディア、消防官など労働者を称えること。また宗教活動の自粛、衛生管理に努めること、人との距離を保つことなど注意点が発表された。

3月24日、夜20時再度モディ首相によるテレビ演説。明日25日から3週間、4月14日まで都市封鎖ロックダウンを行うことが伝えられた。

次の日の朝、薄暗い中、大通りを避けてインドラ寺向かう。先週の日曜日にも外出禁止令は出ていたが市場や町の食料品店は営業していた。もちろん普段よりほとんども人は少ないがインド市民も買い出しに外に出ている。

今回のロックダウンも必要最低限の買い出しや用事はできるだろうと。しかしインターネットを通じて警官が街に出ている者を警棒で殴りつけている姿が多数アップロードされていた。かなり本気なんだと感じた。

3月28日ロックダウン4日目。

いつも食料を買い出しに行く市場横にあるバザール(商店街)からコロナ患者が発生した。消防車が来てビルディング毎、放水や消毒が行われた。この日からこのバザールや市場は完全閉鎖された。しかし食料には困る心配はない、個人店主が荷車を引いて頻りに野菜や果物売り歩いてくるからだ。

この日、インドラ寺の若い僧侶から体調不良者がでた。どうしてもコロナで皆な神経質になっている。病院に行つて薬をもらつて次の日には体調も良くなった。しかし病院では体温も検査しなかつたと言う。翌日、体温計で熱を計らせると38.1度もある。急いで別の病院に行かせて血液検査をしてもらつた。夜には結果がでて通常の風邪であったがいつ誰が罹患してもおかしくない状況に対応の難しさを感じる。

この頃になると誰しも熱がある、咳がでるとは言いだしにくくなっているように感じた。コロナに罹つたとすれば周りも含め大変な状況になるから言い出し難いのだ。



4月5日 ナグプール市内食糧支給所

3月29日ロックダウン5日目。少しずつこの生活にも慣れてきたのかインドラ寺前の床屋が営業している。警官が見回りしていない朝の時間帯だけ隠れて営業しているのだ。

収入が途絶えているものには致し方ない。夕方からは季節外れの暴雨が吹き荒れた。雲で覆われ薄暗くなった窓越しの光に目をやると突風で扉がガタガタと震え始めた。外に出て木々や空の様子を眺める。遠くの道路から濁いた砂が巻き上げられ砂嵐となつて迫ってきていた。

3月30日ロックダウン6日目。昨日の暴雨でインドラ寺のゴミ置場が散乱していた。佐々井上人の号令で若い僧侶メンバーで片付ける。皆んな自粛生活が続き身体がなまっていたので気持ちよく身体を動かすことができた。明日は弟子たちでコロナウイルスについて勉強をする。

ロックダウン後、佐々井上人はインドラ寺から出ず自粛生活を続けている。「春の海、ひねもすのたりのたりかな」佐々井上人の口癖だ。最近ではスマホを駆使してインドで学ぶ事の出来なかった日本の歴史、世界の歴史を学びなおしておられるようだ。

3月31日ロックダウン7日目 佐々井上人は警察署にかけ合い外出許可証を発行してもらった。心体の健全を保ち世界的な不安に対処する。

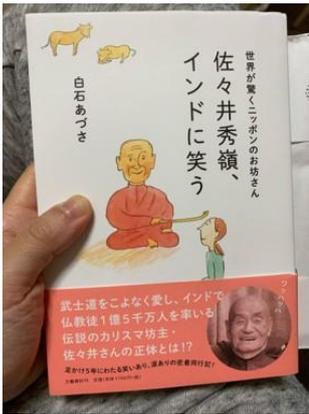
(3月31日記)

インド旅行記
ドンガルカル仏教徒大会参列とオリッサ州仏教遺跡の旅
小川原志保

わたしの実家は、新潟県三条市にある実盛寺(じつじょうじ)という寺院である。父方は代々僧侶であるが、27年前に亡くなった祖父(小川原潮栄)は生前インドに赴き、布教活動をしていたという話を父親からよく聞いていた。「いつかインドに行つてみたいなあ」と思いつつ、なかなか実行できなままだった。

2009年に佐々井秀嶺というお坊さんが実家のお寺を尋ね、祖父のお墓にお参りに来られた。当時わたしは大学進学で家を離れており、あとからその事を聞いたのだが、佐々井上人はインド仏教のトップに立つ、ものすごい僧侶であると知った。そして祖父がインドにいた時期に、共に同じ地で活動をしており親交があったとのこと。時折日本に帰られていたようで「何かの機会にぜひお会いしたいな」と思っていた。

そこから数年が経った。本屋で偶然『佐々井秀嶺、インドに笑う』(著:白石あづさ氏)という本を見つけた。「面白そうだな」と思い軽い気持ちで購入した。



↑インド行きを決めた1冊

佐々井上人の存在は以前から聞いていたものの、どんな方で何をされたのか知らなかったわたしにとって、手に取った『佐々井秀嶺、インドに笑う』は衝撃の連続であった。その生い立ちが絶望で、わたしの知る日本のお坊さんとはかけ離れていた。いや、お坊さんかどうかを抜きにしても、なかなかこんな人は居ない。病気や三度の自殺未遂、女性問題などなど...しかし自らを客観視し、失敗を繰り返しては自分を律し行動する姿と、苦しいときでも周りの人々から愛され支えられる人柄と、運命的な人・場所との出会いの数々に、わたしはとてつもない感動を受けた。(250ページくらいボリュームの本なのだが、大変読みやすく面白い。一晩であつという間に読み切ってしまったのだが、特に後半など大変に感動して涙が止まらず、翌朝は目が腫れて大変なことになった)

本を読み終え、「インドに行きたい! 佐々井上人にお会いしたい!」という想いに駆られた。いつか行きたい、が今のタイミングで行きたい、に変わった。佐々井上人のFacebookアカウントはフォローしていたのだが、改めてまじまじとページをみてみる。2月にインドツアーが予定されているではないか! 佐々井上人にもお会いできるのか! これは祖父のことを聞けるかもしれない。父に「インドに行こうと思ってる」と伝えると、「おじいちゃんはナグプールというところを拠点にしていた。そこにおじいちゃんの建てたお寺があるかもしれない」とのこと。まだ小川原家は誰もその地を訪ねていないという。これ

- <ドンガルカル仏教徒大会参列とオリッサ州仏教遺跡の旅>
- 2/5(水): 成田空港発~デリー着
 - 2/6(木): ドンガルカル仏教徒大会に参列 ...★佐々井上人と同行
 - 2/7(金): ナグプール ...★佐々井上人と同行 (インドラ寺、マンセル遺跡、龍樹菩薩大寺、コンダサワリ診療所)
 - 2/8(土): ナグプール(ディクシャブーミ)、プバネシュワルへ移動
 - 2/9(日): オリッサ州仏教遺跡
 - 2/10(月): スーリヤ寺院、マニワバンダ村
 - 2/11(火): デリーへ移動し観光、夜に成田へ出発
 - 2/12(水): 朝 成田空港着



は行かなければ!

という訳で、いぎインドへ。1月後半から世界ではコロナウイルスが騒がれており、中止になるのではと心配していたが、当時はまだそこまで感染が広まっておらず、無事に決行することができた(数週間遅かったら、行けていなかっただろう)。

2/5(水)の朝、成田空港へ向かう。前日夜まで仕事をしてきたのだが、不在中の業務の引継ぎが終わらず深夜11:00までかかって当初の予定より30分寝坊。京成線で向かうところ、止むを得ず京成スカイライナーの指定席をとり(1000円ほど割増だったが、飛行機に乗り遅れるよりはマシ)、間一髪遅刻は免れた。

9:00 過ぎに成田空港に到着し、無事に南天会の方々・参加者の方々とも合流。年齢も職業も、旅行に参加する経緯もみなさん様々だ。仏教関係者ばかりなのかな?と思っていたが、一般の方が多かった。「インドは初めてで:」という方と「もう数回行っていいよ」という方と、半々くらい。初インドの身としては少しホッとす。同部屋の工藤真奈美さんは今回が4度目のインドだそうで、なんとも心強い! 成田で集合した参加者の中に、亀井さんというお坊さんがいらした(インドで出家された、佐々井上人のお弟子さん)。今回の旅行参加の経緯を聞かれ、祖父のこと・祖父の建てたお寺があるかもしれない、ということ伝えると「それは、佐々井上人がかなりお世話になったんじゃないですか?きつとおじいさんのこと覚えてらっしゃると思います、お寺のことも分かる

と思いますよ。聞いてみましょう」とのこと。これは何か手がかかりが見つかるかも?と期待しつつも、父からは「無理をして探さなくてもよい」と言われていた。インドは広いし旅程も詰まっているだろうから、何か情報を得られたとしても、探し回ったり見に行ったりするのは厳しいかなあ、女一人で行動したりすると危ないだろうし。なんてことを考えながら、搭乗手続きを終え飛行機に乗り込む。

インド航空(AIR INDIA)307便に搭乗する。日本時間で11:30発の予定だったが、少し早めに飛んだ。機内に足を踏み入れた瞬間、早くもスパイシーな香りが漂う。まだ日本なのに、おお、これがインドか!とテンションが上がる。行きのフライトは約10時間と結構長い。到着は現地時間で18:00(日本時間で21:30)の予定。日本との時差はマイナス3時間半だ。

機内では、スパイシーな機内食と変に上がっているテンションのせいか、周りにはみんな寝ているのに目が冴えている。そうだ「佐々井秀嶺、インドに笑う」をもう一度読んで予習をしよう、と本を取りだし読み始めた。だめだ、何度読んでも泣けてしまう。機内はおやすみモードで暗くなり、ほとんどの人が寝ているか映画を観ているかのところ、ひとり涙を堪えて(いや、泣いていたけど)本を読み進めていた。

そうこうしている内にそろそろ着陸。しかし予定より約1時間遅れで16:00頃に到着した。出国手続き(これも結構待った)を終えて、ガイドのラケイシユさん・現地集合の片岡さんと合流。

デリー空港は、想像よりきれいで近代的な感じだった。

ホテルに到着したのは、現地時間で21:00過ぎ。ビュッフェ式の晩ご飯が用意されており、各自好き好きに取り分けていただく。食事中に軽くみんなで自己紹介をし、翌日の旅程と起床・集合時間が発表される。「明日は3:00に1階ロビーに集合、なので2:30頃起床をお願いします」と佐伯さん。あまりの早さに、一同がどよめく。そのとき22:00を過ぎていたので、お風呂に入るなどして23:30に寝られたとして3時間睡眠。しかもデリーのホテルにはこの一泊のみなので、荷物もパッキングして持っていくかないといけない。

明日の天気は:インドの乾季には珍しく曇りで、気温もあまり高くなさそう。事前情報では、朝晩は冷えるが日中は30度くらいまで上がると聞いており、又ドンガルカル仏教徒大会参列の為に白い服が必要と言われていたの、用意してきた長袖の白ワイシャツ1枚を準備する。数時間後にはまとめた荷物と一緒にこの部屋を出なくてはいけないから、就寝(仮眠?)前にちらかした荷物を出来る限りまとめておく。

そんな作業をしながら、同室の工藤真奈美さん(以下、真奈美さん)と少しお話しをした。今回わたしがインド行きを決めた経緯、祖父・佐々井上人との繋がり、実家のことなどをお伝えすると、「それはまたすごい縁ですね!そんな旅に一緒に嬉しです」と言ってくれた。わたしは本当にインドに来たんだなあ、そして遂に佐々井上人と明日お会いできるんだ、とここにき

て実感が湧いてきた。佐々井上人はどんな顔をされるんだろうか、祖父のこと覚えていらっしやるかな、お寺はあるのかな:などと考えながら眠りについた(多分寝たのは0:00過ぎていたと思う)。

数時間後、「ドンドンドンドン」とドアを叩く音でハッと目が覚める。時刻は2:35。2:30より少し前に起きておこうと目覚ましをセットしたのに、二度寝したようだ。そういえばモーニングコールしてくれるという話だったが、電話でなく直接ドアを叩いて起こすパターンだった(しかも5分過ぎてる)。貴重な5分を取り返すべく、わたしは光の速さで身支度をし、パッキングをし、なんとか2:00ちょい前に部屋を出た。ロビーに集合したあとバスに乗り、デリー空港の国際線ターミナルに向かう。シャツ1枚は少し肌寒いくらいの気温だが、シャツと目が覚めてくる。

荷物を預けて手続きを終え、ゲート付近で待機。さっき晩ご飯食べたばかりな気もするが、活動時間が長いのでお腹が空いてくる。近くにポテトチップスの自販機があり、佐々木さんが買って差し入れてくださった。早朝のジャンクフード、しかもインドのピリ辛味がとても美味しい。時間があつたので、実家から持ってきたアルバムをみなさんにお見せし、佐々井上人と祖父との繋がり。今回わたしがこの旅に参加した経緯をお話した。

搭乗時刻を過ぎてもアナウンスがない。ライプールの天候が悪く、飛行機の出発が遅れているようだ。5:00発のはずが9:00まで待って搭乗。そこからデリー

ーを経つまでさらに機内で待ち、結果 2:00 前にやっと出発できた。機内はガラガラで、もちろん飛行機なので席は指定されているのだが、出発後に「座席はフリーでOK」と言われ、みんな窓際など好き好きに座る。

そして約2時間のフライトを終えて無事に着陸したのは、ライブプールでなく、なんとナグプールだった！この飛行機は「デリー→ライブプール→ナグプール→デリー」と回る便なのだが、ライブプールの天候が悪かったたので、ライブプールを飛ばしナグプールに降りたつたとのこと。そんなことあるの!?と思った(しかもナグプールに着いてからそのことを知らされた)が、これがインドなのだ。乗務員は、特に焦ったり申し訳なきような表情をすることも無い。乗客もクレームを言ったり騒いだりする様子も無く、先にナグプールに着いたのかと、どんどん降りてゆく。

先にナグプールに着いた飛行機は、そのあとちゃんとライブプールに引き返してくれることになり、今度はデリー行きの人々も乗せて出発することになった。さっきまで座席フリーで広々と座っていた我々は、そそくさと指定の座席に戻る。このときお隣が佐伯さんだったのだが、ライブプールでお待ちのはずの佐々井上人にさらに遅れそうな旨連絡を取られていた。佐々井上人は首を長くして待っておられて、佐伯さんは天候と佐々井上人のプレッシャーとの板挟みになっているのだらう…一刻も早く合流したいところ(佐々井上人はせっかちなイメージ、本にもそのような描写があった気がする)。天候のせいなので

しょうがないのだが、佐々井上人も佐伯さんも、すぐく気を揉まれているだらうな…と気の毒になりながらも、このハプニングは相当面白いと感じてしまう(ちよつと悪い自分がいた(こめんなきい))。

2:00 過ぎに無事ライブプールに到着した。(無事に着陸した瞬間、隣で佐伯さんがホッと胸をなで下ろされてしまった)ここは急ぎましよう、一同すぐさま飛行機を降り荷物を受け取って空港を出る。あんなに朝早く出たのに、結果4時間押してしまった…佐々井上人は先にドンガルカルルへ向かわれたとのこと。ライブプールは曇り空でまだ霧っぽくモヤモヤしており、地面にはさっきまで雨が降っていた痕跡が。ここで合流した小西さんによると「さっきまで台風がきたような天気でしたよ」とのこと。

ドンガルカルルへ出発。ここまで予定がズレてしまうとお昼ご飯(インドの家庭料理)もキャンセルし、一刻も早く仏教徒大会の会場へ向かわなくてははいけない。乗用車3台に分かれて荷物を積み、即座に移動する。途中ホテルでお弁当をピックアップし、車内でお昼を済ませながら、インドの街並みを眺める(＆車中で睡眠)。

ライブプール空港を車で出発してから約3時間、ドンガルカルルへ到着。幸いすつかり雨はあがり、プラジュニヤギリ(山)へ行進する仏教徒の方たちと合流できた。なんとか間に合った！

車を降り、人々の行進に混ざって歩く。胸の前で両手を合わせて「ジャイ・ビーム」と挨拶する。プラジュニヤギリの頂上にある仏様まで、

ゆつくりと歩を進める。道中、たくさんのインド人仏教徒から写真撮影を求められ応じた。「バンテージ・ササイと同じ日本人の、お坊さん(一行だ!)ということ、純粹に外国人が珍しいのだそう(確かにこのあたりは観光地では無さそう、あまりない機会なのか)。我々「Japanese」一行は撮影依頼が殺到し、まるでアイドルにでもなったかのような気分になる。

最初は「Police OK?」などと聞かれて、もしや写真撮ったあとにチツプ!とか言われるのかな?と警戒してしまつたのだが、そんなことは一切無く、むしろとても感謝された。おそらくミハハハなのにシャイな人が多いのである、スマホを抱えて笑顔で「チラチラ」とこちらを見てくるが、なかなか声を掛けてこない。が、誰かひとりが思い切って声を掛け、撮影に応じると「わたしも!」「ぼくも!」とたくさんの人が寄ってくる(笑)。あとで分かつたのだが、我々に危害が加わらないよう、現地の警察官がさりげなくガード・誘導してくれていた。何というVIP待遇…改めて佐々井上人のすごさを実感する。

途中から坂道となり、階段が続く。インド人からの撮影に応じながら、20分くらい歩いただろうか。頂上の大仏が見えてきた。

仏様の乗っている台の上に登り、パンチヤ・シーラ(三帰五戒文)と般若心経を唱える。

この山頂に登つたとき、佐々井上人がわたしのすぐ間近に居られたのだが、あまりの人の多さに「はじめまして…」と緊張気味にお声掛けするのが精一杯

だった…そしてこのときが、この日最も佐々井上人にお近づきになれた瞬間でした(以降きちんとお話しできるタイミングは無く、明日に持ち越し)。

そのあと下山し、ふもとに設営されているステージに向かう。式典が行なわれるのだが、なんとわたし達もステージに上がり佐々井上人と同じ一番前の列に座るよう促される。歓迎の意であるマリーゴールドの花輪をたくさん首にかけられ、来賓?のようなおもてなしにビックリ。

何人ものお偉い(と思われる)方、そして佐々井上人がスピーチをする。残念ながら言葉が全く分からないが、初めて生で聴く、佐々井上人の声はとて力強く、84歳とは思えない気迫だ。

我々南天会その他に種智院大学の(一行も参加されており、我々が佐伯さん・種智院大学の先生も代表してご挨拶スピ





↑多くの仏教徒が佐々井上人のもとを訪れ、膝まづき手を合わせる。

一チ。
多くの仏教徒が佐々井上人のもとを訪れ、膝まづき手を合わせる。
他にもアンベードカル氏の歌・ダンスが披露されたりと盛りだくさん。ここで「誰かこの中で、余興ができる人居ませんか？」と伝言が回ってきた。えっ？この場？一瞬なにか出来ないか考えた。何かしら用意していたらやったかもしれない(歌・楽器など)が、度胸無く断念してしまっただ。

あとから聞いたのだが、佐々井上人はこういった場での余興をとっても喜ばれるのだそうだ。そうだ、浪曲のプロでいらっしやるし、歌がお好きと本に書いてあったなあ。しくじった…異国の地で、しかも大衆の前だからと急にビビってしまった(何かNGとかあるとマズいとか考えてしまい)。用意がなくても、身体一つでパツとできる芸の一つ(そうなるかと歌?)でも、常日頃から考えておくべきだと痛感。これはわたしの今後の課題です(真顔)。

だんだんと日が暮れ寒くなってきた。18:00前に式典は終了。シャツ一枚で結構寒かったので、おそらく気温は15度を下回っていたのではないかと思う。

ドンガルカルを出てから4時間弱で、ナグプールのホテルに到着した。23:00少し前くらいだったと思う。ビュッフェ形式の晩御飯をとりながらひと息つく、疲れとそれを上回る不思議な感情に包まれた。たくさんのインド人仏教徒たちとインド

車に乗り込むと体温が復活しホッとしたが、車の外ではたぐさんのインド人が見送ってくれて、車の中からも「ジャイ・ビーム！」と最後まで手を合わせ続けた。このあとはナグプールのホテルに向かうが「その前にチャイをご馳走になる」とのこと。少し離れたところにあるカフェ?のような建物で、種智院大学のみなさんと共にチャイをいただく。温かくて甘くて、少しスパイスで美味しい。一緒に玉ネギの天ぷら?のようなものも出てきて、それも美味しかった。ここからナグプールのホテルまで、なんと車で4時間。インドは広いなあ。。。

この日は約7時間車で移動したので、車内からインドの道路事情をずっと目にしてきたが、インド人の交通マナーには驚く。車・バイクの運転は粗いが、歩行者も平然と車の横を歩いている(今回の旅行中そもそも信号機や横断歩道は数少なかつた)。ドライバーは事故を起こさないよう気を付けつつも、スピードを上げて前の車をガンガン追い越すテクニクを持っている。ナグプールへの道中も、1車線しかない道路なのに対向車線にはみ出しながら前の車を追い抜いていく。夜道で街灯のほとんど無いところ、かなりのスピードで我々を運んでくれた。ちよつと心臓に悪かつたが。

この日も種智院大学の一行と行動を共にするということで、ここで合流。

の街並み、そして佐々井上人。いろいろハプニングもあつて、なんだかすごい1日だったけど、まだ8日間の内の2日目なのか：なんて濃いんだ、インドという国は。

翌日の予定が発表される。朝8:00に佐々井上人の暮らすインドラ寺に行くとのこと。時間帯は少し早いのだが、連日のハードスケジュールで錯覚?しているせいか、おお、ゆつくりできるー!と一同は喜ぶ(笑)。インドラ寺を参拝したのち、佐々井上人と一緒に遺跡や寺院などを巡るそうだ。よし、明日こそちゃんとご挨拶しよう、と気合を入れ直して就寝。

2/7(金)朝、6:30頃起床して準備をする。ここナグプールのホテルには2連泊できるので大きな荷物は置いておけるが、しっかりとパッキングして鍵を掛けておく必要がある。

朝食を終えると、この日も車3台に分かれて移動。まずはインドラ寺を目指す。ナグプールは人口250万人、マハラシュトラ州の中ではムンバイに次ぐ大きな街だが、観光ガイドブックなどにその地名はほとんど載っていない。土地は広くて、ドンガルカルと比べると道路は舗装されているところが多い。しっかりと街が出来ている感じだった。そこに寺院や学校・お店などが並んでいる。10分弱でインドラ寺に着いた。日本のお寺とは全然見た目が違う。インドラ寺は肌色に近いピンク色の外観で、中は広々として風通しの良さそうな作りだ。



朝早くから、佐々井上人が我々を迎えてくれた。一同はお堂でお参りをし、佐々井上人のお話が始まる。風邪をひいておられるそうで、声がガラガラだ：昨日の仏教徒大会は寒かったので体調を崩されたのであろう。声を振り絞ってはいるが、ちゃんと聞き取れない。途中からマイクが入るが、接触の関係で声が入ったり切れたりしている。このとき実は「いよいよご挨拶を…」と少しづつ緊張してきて、佐々井上人が何を話されていたかあまり覚えていない(爆)。このあとひとりひとりご挨拶の流れになる。

「はじめまして、小川原志保と申します、あの、小川原潮栄という僧侶の孫です。30年以上前に、祖父もインドに居りまして：「恐る恐る自己紹介をする。するとパツと表情が変わり、一なに！小川原潮栄上人の孫！おお！そうか！」とすぐに分かっていただけだ！「あの人にはなあ、俺は、本当にお世話になったんだよ：そうかそうか、よく来たなあ！」きつと佐々井上人も驚かれたことだろう。祖父は佐々井上人の約2



0歳年上、話を聞くに当時インドで祖父には大変お世話になったのだという。まさかそんな人の孫が、予告も無く突然ぬつと現れたのだから、そりゃビックリする。

ひと通りの自己紹介とお話しを終えたあと、佐々井上人は佐伯さんに「ちよつとー俺(まさか孫が来るとは)聞いてなかったぞー」と仰っていた。佐伯さんも「いや、私も聞いてなくて…」そうですよね…すみません、事前にお伝えしておけばよかったですね。まあサプライズと言うことでお許しください。(笑)

このあと車に乗り1時間ほど移動、マンセル遺跡へ向かう。まさかそこが祖父のゆかりの地だったとは、考えもしいなかった。

マンセル遺跡に到着し、車から降りる。そこには広大な敷地があり、塔やお釈迦様の像・石碑などがたくさん建っていた。敷地の中を少し進むと、『南無妙法蓮華経』と書かれた大きな塔が建っていることに気が付く。「あれ？法華経の塔がある？」インドに来てから初めて法華経の文字を見た気がする…日蓮宗系の塔なのか？と近寄る。



この前日に父親から「ナグプールに『南無妙法蓮華経 日秀』とおじいちゃんが書いた石塔があるかもしれない」という連絡が入っていた。塔をよく見るとそこにはまさしく、日秀と書かれていた！それを目にした瞬間、佐々井上人に「おがわらー」と呼ばれた。「ここにきなさい」隣に並ぶと、石塔と遺跡について、そして祖父のことを話してください。

その石塔に書かれた字は祖父のものであった。佐々井上人によると、祖父はこのあたり一帯の土地を買い、そこに眠るマンセル遺跡を護ったのだという(そうであればヒンドゥー教徒がやってきて、勝手に遺跡を掘り壊してしまう恐れがあったからだ)。当時まだ遺跡は発掘されていなかったが「ここに遺跡ある可能性が高い」と言われていた。祖父は家を売って土地を買い、基盤を築いたそうだが想像していた以上にスケールの大きな話、しかもそれが事実ということが信じられない。そして佐々井上人から直接このことを聞けるなんて…！「お前をおじいちゃんか、この土地を買ったんだぞ！」佐々井上人がみんなの前で言い放つ。おおおーとどよめきと拍手が起きる。何が何だかよく分からない状況だった

↑南無妙法蓮華経の石塔。赤丸の中に『日蓮宗日秀』の文字があった。日秀とは祖父の僧名。



(笑)。

このマンセルの敷地はとにかく広い。文殊師利菩薩大寺と向かい合うような形で、東日本大震災の慰霊碑が建てられていた。みなで手を合わせ参拝した。佐々井上人は2009年に44年ぶりに一時帰国されたとき「最初で最後の帰国」と決めていたが、その2年後に東日本大震災が起きたときに真っ先に被災地に駆けつけ、慰霊行脚を行われたそう。

慰霊碑をあとにして、丘に登り南天鉄塔を目指す。佐々井上人もお弟子さんに付き添われながら、かなりの急斜面をどんどんと登る。赤土と赤茶の岩場でできた斜面、そこに転がる石はきれいな模様をしていた。しゃがんで石を見ていると、佐々井上人がすかさず「おいどうした、具合悪いのか？」と気づく。なんて優しい人なんだろう。我々でも息のあがってしまう急斜面を登りながらも、人のことを気遣うなんて、流石だなあと感動する。

↑→結構な急斜面。佐々井上人の気力と体力はすごい。

「いえ、石がきれいだなと思って見えました、記念に持って帰ろうかな」と呟くと「おお、そうか、そうしなさい」と言われ、形の良さそうな石を探す。よくよく考えたら、遺跡にあるものを持って帰るのはあまり良くなかったかな…でも佐々井上人の〇×が出たと解釈しよう。ふたつほど石を選び、袋に入れて持ち帰った。

南天鉄塔に辿り着いた。ここは大乗仏教の創始者である龍樹(りゅうじゆ)が文殊菩薩から大乘経典を授かったと言われている場所だ。

登頂した印として塔婆を立て、佐伯さんがお経を唱える。曇り空だが心地よい風が吹いていて、斜面を登って少し熱くなつた身体には気持ちが良い。目を瞑り手を合わせる。とても心が穏やかになる。不思議とお腹の底からポカポカしてくるような感覚を覚えた。丘に登ったから？スパイスを摂取しているか



ら?とも思ったが、祖父が空からスツとやってきて、近くに居てくれているような気がした(このあとずつと暑くて、この日は一日中半袖だった)。お経を終えて、南天鉄塔を降りる。登ってきた方とは「反対側に歩き、そこからしばらくすると、巨大な遺跡が目の前に現れた。ここは僧院があったときれており、何世紀にも亘って蓄積された遺跡らしい(昔の遺跡の上にさらに遺跡が建ち…を繰り返しているようだ)。

佐々井上人は遺跡には登らず、入り口に付近に座られていた。ここで少し祖父のことを聞いてみた。「お前のおじいちゃん、藤井日達の後継者ともいわれていたんだ、でもそれをよく思わないう者たちもいた」と石塔前で説明されたときに仰っていたのが少し引つかり、思い切って聞いてみる。「祖父は嫌われていたんでしょか?」「そんなことはない。おじいちゃんは立派な人で、みんなからとても尊敬されていたんだぞ」海外布教に大変貢献したということ、何やら「賞も受賞していたらしい(賞の名前忘れてしまった、海外伝導なんとか賞?)」。

僧院に登る。かなりの広さと高さで、足を滑らせるとかなりの深さまで落ちてしまう。気をつけながらも、その景色の広大さにもう一段上へと登らずにはいられなくなる。

ここは1998年まで遺跡の発掘がされていなかったが、いざ掘ってみるとこれだけ大きなものが出てきたのだという。祖父は1992年に死去しているの、この景色は見る事ができなかったが、ここが重要な場所であることは知っ

ていて、この地を保護したのだろう。
 ※インド帰国後に『破天(著:山際素男 光文社新書)』を読んだところ、祖父の名と功績が書かれていた。それによると、この地は祖父の基金で基礎がつくられ、面積は約14エーカー(約56,000㎡)。1998年からインド中央政府と佐々井上人の設立した龍樹遺跡発掘委員会が共同で発掘作業をしているという。(インド渡航前に破天を読んでおけばよかったと、これまた後悔…)



なんとも胸いっぱい思いでマンセル遺跡をあとにし、龍樹菩薩大寺へ。ここは2010年に佐々井上人の建てたお寺で、多くの日本人が建設費用の寄付をしているそうだ。荻須上人がお経を読まれ、みんなでお参りする。

そのあとお寺の中でお弁当をいただく。写真を撮り忘れたが、インドのお弁当は、サンドウィッチ・パン・マフィン・ゆでたまご・鶏肉・フルーツ(バナナ、りんご、オレンジ)などが、容器にドサツと入っている。ちよつと栄養バランスは偏っているが、ボリュームはかなりあって一度に食べきれないほど。

食後に佐々井上人にお土産をお渡し。みなさん、お布施や日本食などを用意していた。わたしは父から預かったお布施とお醤油・おせんべい・都こんぶなどをお渡しした(ちよつと塩分多かったかな…)。このときチャイをいただいたのだが、チャイを運んでくれたインド女性の話が『佐々井秀嶺、インドに笑う』に書かれており、その昔壮絶な人生を送っていた方だった(小指が無…)。あとでそのことに気がついた。小指、見ておけばよかったな。

佐々井上人は翌日のシルプール仏教徒大会がある為、夕方にはここを立たれ、別行動となる。車で10時間程の移動だそう。昨日もドンガルカルからナグプールまで4時間移動しているのに…なんという体力。体はきつともお疲れなのだろうけど、そんな様子を見せずに我々を案内してくださる。

このあと車で少し移動し、コンダサワリ診療所へ。ここは佐々井上人の建てた無料の病院だ。運営者が変わってちよつと1周年になるということでパーティーが開かれ、そこに出席させてもらった。病院内を見学させてもらったが、患者らしき人は居ないようだった(2階にはいたのかな?)。ふと佐々井上人が、隣にいたわたしの顔をまじまじと見る。

「いやあ、本当に、小川原上人の孫が来てくれて。俺は嬉しくて嬉しくてね」と笑顔で仰った。思いがけない言葉に、目頭が熱くなる。「そうですね、ありがとうございます、来てよかったです」と顔を近づけて返事をした瞬間、右頬をパシッと叩かれた!ビックリして一瞬で涙が引いたが(笑)、嬉しき・激励・愛情のようなものを感じ、思わず笑ってしまった。

持ってきたアルバムをお見せした。祖父との写真を懐かしそうに眺められていた。「おじいちゃんは、柔道・剣道といった武道が達者で学問にも優れ、馬術も得意だったんだ」と教えてくださった。馬術のことは知らなかった!又これらの写真はナグプールで撮られたものだろうだ。

「とても貴重な写真だ。大事にとっておきなさい」と言われそのままカバンにしまったが、今度お会いするときに、焼き増ししたものをお渡しできればなと思った。

だんだんと夕刻に近づき、佐々井上人ともここで別れた。来た道と違うルートの方がホテルへ早く帰れるそう。途中まで車で先導してくださるという。最後の最後まで、本当に心遣いの素晴らしい方だ。

最後に、佐々井上人が車に乗り込まれるとき「お前、名前は何なんだ」と聞かれた。「しほです、志(こころざし)に保つと書いて、志保です」とつきに答えると、ニツと笑って「いい名前だ」と仰った。

「おばあちゃんは元気か?」「…元気です!(施設に入ってるしボケてるけど…)」「お父さんは?お母さんは?」

「元気です！」「兄弟は？」「弟がふたり居て、ひとりがお寺を継ぎます、元気です。今度インドに連れてきます！」
 「おお、そうだな！」
 そんな会話をして、佐々井上人とお別れをした。

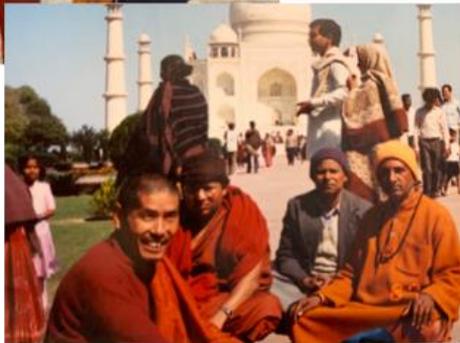
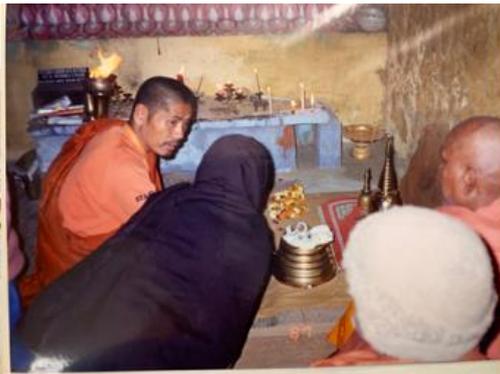
帰りの車では、この日の出来事が壮大すぎて自分の中で収まりがつかず、やや混乱していた。祖父とマンセル遺跡：何が何だかよく分からなかったが、「本当に、来てよかった」と心の底から感じた。と同時に、「ここで終わり・これで満足では無く、まだまだ知りたいことや見たいことがたくさんあって、それを行動に移さなくては！」というよく分からない使命感のようなものを感じていた。まず本を読もう、仏教のことを知ろう、あと余興も…（これは蛇足）。いろいろな感情に包まれながら、車窓を眺めホテルに戻る。18:30くらいに到着して今日の予定は終了。ここ数日に比べたら何とも早い終了時間！ナグプールは明日経つので、今日が最後の夜ということとでちよつと街歩きでもしようか、と目論んでいたら雨がザッと降ってきた…。食後に雨があがっており、佐々木さん・工藤さん・真奈美さんと4人で街歩きをした。土曜の夜で割と人通りが多く、賑やかだった。お土産屋さんのようなものは無く何も買わなかったが、でこぼこの道を歩き、横断歩道も（交通ルールも？）無い道路を渡るだけで面白かった。

ホテルの部屋に戻り、父にLINEで一報を入れる。石塔あったよ、そしておじいちゃんがマンセル遺跡の土地を買っていた、と。長いような、あつという間だ

つたような、とにかくものすごく濃い一日だった。佐々井上人にお会いできて本当に良かった。
 旅の締めのようなになってしまったが、旅程はまだ半分も終わっていないから驚きだ（笑）。
 （※後半未掲載 文中抄略 事務局で編集させていただきました。）



←↑佐々井上人と祖父。
 佐々井上人50歳くらい、
 祖父は72歳（この5年後に祖父は死去）。



↑佐々井上人とインドの人々

↑祖父とインドの人々

南天会会計報告（2019年12月1日～2020年3月31日）

(収入)	前期繰越	1,064,735
	会費・支援金	607,633
	本販売	11,000
	佐々井上人専用車寄付	500,000
	日本テレビ「発言X」出演御礼	100,000
	週刊文春「新・家の履歴書」インタビュー謝礼	97,200
	収入合計	2,380,568
(支出)	佐々井上人へ支援金(12月14日)	1,000,000
	佐々井上人へ支援金(2月8日)	200,000
	佐々井上人専用車寄付	500,000
	亀井インド渡航費援助	154,120
	龍族17号発送費用	59,370
	交流会会場御礼	10,000
	通信費等	3,874
	インド支援品購入	33,000
支出合計	1,960,364	
	差引残高	420,204

単位:円

【特別支援金寄付者御芳名】 ※上記期間中に年会費とは別に南天会に支援金をいただいた方のお名前です。

青木亜紀 伊藤友人 上杉紀勝 内海誠仁 漆間宣隆 岡本博子 荻須眞教
 奥平心月 小野重徳 加藤政子 恭俣寺 城戸佳織 工藤真奈美 河野太通
 佐々木恭治 浄泉寺遊亀仏教婦人会 杉本玄海 田口裕視 土居奈生子
 内藤了瑞 中原永昌 西村和代 野口恭博 平野勇輝 古屋由美子 本多末男
 三宅初美 吉嶋敏生 その他、世話人賛同人各会員の皆様から様々なご支援をいただいております。

●インドへ支援金贈呈

南天会から佐々井上人へ支援金を贈呈しました。(12月17日100万円、2月8日20万円)

●亀井竜亀師インド渡航費援助

南天会現地連絡員業務をお願いしている、お弟子の亀井竜亀師のインド渡航費を援助いたしました。

●佐々井上人専用車寄進のお願い

前号でお知らせしました、佐々井上人の専用車の購入支援について、事務局記事が高額な金額指定となっており、大変失礼いたしました。緊急的な意味合いも含めて、深く考えずにご案内してしまいました。引き続き金額指定なしで再告知いたします。現在までに50万円の送金をいただき、南天会ツアーに携行して佐々井上人にお届けしました。今は必要時にインドラ寺事務局長のアミット氏にステーションワゴンを提供していただいています。しかし長距離移動など他人の車を酷使することになるので、早めに購入したいとのことでした。ご協力いただける方は南天会事務局までご連絡ください。

●南天会 一般社団法人化

この度、南天会は事務局業務の拡充およびより広い支援体制の確立のために「一般社団法人 佐々井秀嶺公認支援団体 南天会」として法人登録いたしました。それに伴い事務局を刷新し、現事務局（佐伯、小林）に加え理事として賛同人の小池一郎氏、亀井竜亀氏、監事として中村龍海氏を任命いたしました。今後も支援者ネットワークとしての活動を継続し、佐々井上人とインド仏教の支援、周知、顕彰を行ってまいりたいと思います。皆様、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

◆南天会現況 (令和2年3月31日現在)

正式会員数 199名

龍族発送者 337名

※贈呈者、大菩提寺裁判費用支援者、交流会等参加者を含みます。

※会費未納の方、連絡先不明の方を整理いたしました。

◆賛同人 (50音順)

漆間宣隆 (浄土宗浄土院住職・前岡山県佛教会会長)

奥平心月 (釣月庵庵主)

織田隆深 (高野山真言宗真成院住職・密門会会長)

小野重徳 (仏国土の会会長)

黒澤雄太 (剣士・日本武徳院師範)

小池一郎 (株式会社マクス・シントー常務取締役)

島影 透 (株式会社サンガ社長)

高山龍智 (佐々井上人お弟子)

土屋信裕 (顕本法華宗弘通所法華行者の会主宰)

富士玄峰 (臨済宗・元ナグプール同友会世話人)

宮淵泰存 (日蓮宗妙光寺住職・長野県修法師会会長)

宮本光研 (真言宗御室派元執行)

宮本龍勝 (佐々井上人お弟子)

山本宗補 (フォトジャーナリスト)

※賛同人について

当会の主旨を理解し、協力、推薦する人を賛同人とし、会の運営に助言提案等をいただいております。

※世話人について

南天会諸業務をお手伝いいただける方は皆世話人とし、特に任命等はいたしませんので、どなたでも気軽に「ご参加ください」。

南天会会費・支援金はこちらまで

【金融機関】 ゆうちょ銀行

【加入者名】 南天会

【口座番号】 01380-0-90164

「龍族」同封の振替用紙、もしくは郵便局備え付けの振替用紙をご利用ください。

会員種類と年会費

支援会員 10,000円 (会費+支援金) / 年

一般会員 5,000円 / 年

学生会員 2,000円 / 年 (※大学生まで)

ブッタガヤ大菩提寺裁判費用援助

支援者の方には、「龍族」誌上にお名前を記載し、裁判経過および返還運動の状況を報告いたします。

※「大菩提寺裁判費用援助」と明記ください。

(南天会事務局)

〒710-0004

岡山県倉敷市西坂 1582-1

一心念誦堂内

TEL 086-463-9391

佐伯隆快(090-5304-8955)

小林三旅(090-4538-2677)

南天会ホームページ www.nantenkai.orgメール nantenkai@gmail.com

南天会フェイスブック、ツイッター
ご利用ください



佐々井上人来日延期のお知らせ

本年も6月に佐々井上人の来日を計画しておりましたが、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大の影響により、スケジュールが立てられない状況となっております。今後の推移を見極めたうえで、改めて計画を立て直したいと思っております。この間ぜひインドへのご支援よろしく願い申し上げます。

龍尾言

ユーチューブに佐々井上人からのメッセージがアップされ、タイトルに「遺言」とあるので、あわてて文章に起こしながら拝聴した。内容は本文の通り。1時間50分、長々としたメッセージだが途中講談調のところもあり、ナグプールの日常や、インド仏教の歴史、政治や国際情勢など貴重な情報もちりばめられている。日本人やインド仏教徒への心遣い、インドのコロナ禍の実情などもよくわかる。自粛中なのに非常にお元気な声の様子や身振り手振りまではお伝え出来ないの、映像をぜひ見てもらいたい。

最後まで見た時、龍族のあなたは画面に向かって必ずこう言うだろう。 ジャイビーム!

(佐伯隆快)